様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年５月２０日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2007～2010
課題番号：　１９６１１０２３
研究課題名（和文）　指定品の展示・収蔵状況の実態調査　～考古資料を中心として～

研究課題名（英文）　Investigation of the actual conditions of archaeological objects designated as national treasures and important cultural properties during the exhibition and storage

研究代表者
岡本　広義（OKAMOTO HIROYOSI）
財団法人元興寺文化財研究所・研究部・学芸員
研究者番号：７０２６１２１１

研究代表者の専門分野：時限
科研費の分科・細目：博物館学
キーワード：指定品、考古資料、保存処理・修理、展示・収蔵環境、実態調査

１．研究計画の概要

指定品のうち、考古資料は資料価値を維持するためには、何らかの科学的な処置が必要である。このためすでに実施された資料も多い。しかしこの処置を行った資料は適切な展示・収蔵環境が求められる。

本研究は、保存科学的立場だけでなく、考古学や博物館学的立場から、展示・収蔵状況を調査し、展示・収蔵方法の問題点や課題を明らかにし、今後の博物館等の指定品管理に反映させ、さらに学術資料として価値の高い指定品の展示･収蔵を多方面から調査研究することで、資料管理を行うためのよりよい展示・収蔵方法を提示するものである。

２．研究の進捗状況

研究を進めるうえで、現地での調査は重要であり、展示・保管は地域ごとの資料の考古学的な特色や温湿度等の自然環境の相違が認められることから、研究期間に合わせて全国を 4 地域に分け、地域ごとに調査を行っている。

すでに 3 カ年度調査を行った機関における傾向としては以下のとおりである。

当初から推測はできたが展示環境には各施設ともに温湿度管理、照明の配慮や窓のある場合は紫外線カットフィルムを貼るなど環境面には留意している。

しかし、収蔵環境はかなり課題が多い。指定品と同じ収蔵庫に民俗資料、紙資料、皮革資料や絵画資料などが収納されているため温湿度設定が難しかったり、収蔵場所が少ないため、重ね置きなっていたりしている。この事例は大規模施設に多く、小規模施設は他資料との収蔵はあったとしても、指定品の管理には細かなところまで配慮している。

指定品の管理者からみると、保存科学担当者が含まれた施設は展示・収蔵環境に課題は少ない。考古学担当者が中心の施設は、展示環境には配慮しているが、収蔵環境への対応はやや欠如する。特に虫害等に対策がとれていない。

次に、設備的にみると、空調対策と耐震対策である。金属製品や木製品などは温湿度管理が必要であるが､24 時間空調が稼働している施設はほとんどなく、将来的に問題が生じる可能性がある。展示施設に免震装置を設けている施設は数館だけであるし、収蔵庫に転落防止用ベルトとの対策を施している施設も少ない。

調査を実施した施設へは、このような課題を口頭で伝え、改善可能な範囲から実施を依頼していると同時に、調査報告書として提出することを基本としている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

3 カ年度で予定していた地域をほぼ終了しており、調査を行った各施設の課題や改善策等を検討した。

４．今後の研究の推進方策

最終年度である 4 カ年目の九州を中心とした地域の調査を行うとともに、時間的に調整

ができなった施設、追加調査が必要な施設や緊急的に調査が必要な施設も調査を時間の許す限り行う。
　これらの成果と3カ年調査した施設に提出した報告書を合わせて、研究報告書を作成、刊行する。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）
伊藤健司
「出土木器の保管管理」　『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』　無　2009　p323～330

〔学会発表〕（計1件）
伊藤健司・山田卓司（代表）・辻村希里子・桃井宏和・岡本広義
「指定品の展示・収蔵状況の実態調査～関東以北の地域を中心に～」　日本文化財科学会
2009年7月11日・12日　名古屋大学